

ねむり虫の次郎

(沖縄県)

むかし、首里に、次郎という若者が住んでいました。次郎はなまけ者で、毎日、働きもせず寝てばかりいました。父親と母親は年をとっていて、とてもまずしく、食べる物もろくにありませんでした。そこで、次郎に、

「おまえもりっぱな若者だ。起きて働きに行っておくれ」とたのみました。けれども、次郎は知らん顔で、昼も夜も、起きては食べ、食べては寝てばかりいました。村の人たちは、そんな次郎を見て、

「あいつは、ねむり虫だ」といつて、ばかにして笑いました。

ところが、あるとき、次郎は、いきなりむっくり起きあがって、母親に、

「しらさぎを一羽買ってきておくれよ」とたのみました。母親は、

「しらさぎなんて、そんな鳥を何にするんだ」とたずねましたが、次郎は、わけを話しません。母親が、

「こんなにびんぼうなのに、しらさぎを買うお金なんてないよ」といつても、次郎はききません。しかたなく、母親は、人にお金を借りて、しらさぎを一羽手に入れてやりました。次郎は大喜びして、しらさぎをこっそりかくしておきました。

次郎の家のとなりに、たいそうお金持ちの屋敷がありました。

ある晩、次郎は、となりの屋敷の人たちがぐっすり眠りこんでいるのをたしかめてから、白い着物を着て、しらさぎをふところに入れ、となりの庭の大きなガジュマルの木*によじのぼりました。そして、木の上から大きな声でいいいました。

「おい、この家の主よ、出てきて天帝のおことばを聞け」

金持ちの夫婦は、びっくりして大あわてで庭に出てきました。すると、木の上から声がしました。

「われは、人間ではない。天帝より命を受け、おまえたちに、天帝のお言葉を伝えるにきた。おまえたちのひとり娘を、すぐに、となりの次郎と結婚させよ。次郎に家をつがせ、次郎の両親を引き取って一生やしなうのだ。次郎は、今はねむり虫などと笑われておるが、かしこくまじめな男だから、この家はきつとさかえるであろう。もしこの命にそむ

けば、おまえたちはひどいばつを受けるであろう」

金持ちの夫婦は、これを聞いて、ありがたがって、何度もおがみながら、

「必ずおっしゃる通りにいたします」といいました。次郎は、

「では、われは天に帰って、そのことを天帝に伝えよう」といって、ふところから、しらすぎを出して空に放しました。夫婦は、しらすぎが飛んでいくのをながめて、天帝のお使いが帰っていくのだと思いました。そこで、また、ありがたがって何度もおがみしました。夫婦が部屋に入ってしまうと、次郎は、うまくいったと大喜びで家に帰りました。

あくる朝、金持ちの夫婦が、次郎の家にやって来ました。そして、父親と母親に、

「どうか、次郎に、うちのひとり娘の婿になつてもらえまいか」とたのみました。ふたりはびっくりして、

「あれは、なまけ者で毎日寝てばかりおります」といってことわりました。けれども、金持ちの夫婦は、

「これは天帝の命なのです。ゆうべ天帝のお使いが来て、次郎を婿にすれば、家がますますさかえるだろうとおっしゃったのです」といいました。

こうして、ねむり虫の次郎は、とりのお金持ちの婿になり、父親と母親を引き取って一生だいにやしました。それからというもの、次郎は、はじめに一生懸命働いたので、家は、ますますさかえたということです。

* 首里 地名。沖縄の那覇市にある

* しらすぎ 鳥。ダイサギ・コサギなど、羽の色が白いサギ

* ガジュマル 熱帯地方に生える高木

* 天帝 天を支配する神